

布団の中で夫に抱きつかれるたびに彼女は思い出す。
この男と契りを交わしたあの日の口づけを。

過去――

「ねえ、式…キスしてもいい？」

場所は当時借りていたアパートの自室。

色々あって、転がり込んできた幹也と初めて同衾しようというタイミングである。

既にこのときプロポーズは受けており、それまでの曖昧な関係から婚約者として進展したタイミング。

その状況でキスを求められたら、その先まで求めていることなど、式とて理解していた。

むしろなまじ死別した男性人格をエミュレートしている乙女だからこそ、男の生理現象《サカリ》にも理解があるつもりである。

「まあ…口づけだけなら構わないぜ」

本心としてはその先を求めており、だからこそ風呂の時間ではいつも以上に念入りに身体を磨いていた。
それでも心の準備ができていないからこそその回答であるが、それで満足かと言わんばかりに幹也は式に覆いかぶさる。

早くキスしてみろという挑発と、早くキスしてほしいという懇願を混ぜたキス顔。

瞳を閉じているのは気恥ずかしくて直視できないから。

式自身、シラフであれば自ら嘲笑しそうな乙女な態度で求められた幹也の鼻息は荒く、本当に軽くキスするだけのつもりであつた彼は式を抱いて身体を弄つた。

唇だけのマウストゥマウスから舌を絡めるフレンチに移行し、一瞬気色悪い出来事が脳裏に浮かんだが、婚約者の熱い舌がそれをかき消す。

唾液を混じり合わせる粘膜接触は「これからアソコもつなげ合わせて、わたしは彼のものになるのだろう」という感覚が式の背中を通る。

その背筋を抱きしめながら愛撫するものだから、式はゾクゾクとした感覚が心地よい。

キスだけなのにそれだけとは思えない感情が溢れてきた。

知識としては女の喜びに近いのだろう。

大っぴらには言えないが、自らを慰めている時の感覚に近い。

だが近いだけでこちらのほうが上。

求められているのは理解しているが、それ以上に自分が彼を求めている事実。

自然と自分から幹也の身体を弄っていることに式は気づいていない。

求められている以上に彼を求める式の姿は間違いなく女であつた。

「……まだ続けるのか？」

口づけを交わし続けて何度目かの息継ぎの末に、式はとろけた笑顔で幹也に問う。

半身の喪失以来、穴埋めとして模倣していた「男の顔」でもなく。

結婚、出産を経て見せるようになった「母の顔」でもなく。

あの日と同じ「女の顔」で幹也に訪ねた理由もあの日にあった。

あのときは互いに若くてお互いにサカリがついて若さがあつたのでそれすらも逢瀬を彩る飾りになった。

いや、今でも体力的には問題はないであろうが、あのときのような粗相をされたら、横で子供も寝ているこの状況では気恥はずかしい。

それにまだ二人目が出来ていないので、どうせ「する」のならば粗相をしたら勿体ない。

その意味が幹也にも通じているのは、今にも破裂しそうになっている彼の一部の熱を見れば明らかだった。